**SAKIGAKE vol.5 命を救うひと**

**9月1日　防災の日に考える**

命を救うという信念と志を持ち、災害から人の命と財産を守る、それが救助隊員です。オレンジ色の服を着た、通称「レスキュー隊」といえば、なじみ深いのではないでしょうか。

　最優先となる仕事は、救助工作車に乗車し、火災や自然災害、交通事故などの災害現場に駆けつけ、人命救助をすることです。火災の際は、消火活動の応援や、鎮火後は火災の原因を調査する仕事もあります。

　消防士の中でも、気力や体力、判断力に優れ、高度な知識と救助技術を持っている者が、救助隊員となれるのです。

　救助隊員となった後も、訓練での技能評価など、適正が無いと判断されれば外されてしまうため、日々「心・技・体」を磨きます。それでも、消防士の多くは、オレンジ色の服を着ることを目標にします。

　昨年8月に開催された、救助隊員の救助技術を披露する最高の場である、全国消防救助技術大会で、大崎地域広域行政事務組合消防本部の3人が優秀な成績により入賞を果たしました。「ロープブリッジ（基礎訓練）」（水平に張られた20メートルの細いロープを、手と足のみで往復する時間を競う）で入賞を果たした山村さんは、「救助隊員になっただけでは何も生み出さない。信念や志を持ち、何事もあきらめないことが大事です。」と熱く語ります。

　「ロープ応用はん（連携訓練）」（登はん者と補助者が2人1組で、建物の上から垂らされた15メートルのロープを機材を使わずに登る時間を競う）で入賞を果たした森田さんは、「命を守るという仕事を達成したとき、心の底から消防士になってよかった。」と話します。

　森田さんとともに「ロープ応用登はん（連携訓練）」で入賞した氏川さんは、「万が一災害が起きても、市民のみなさんは安心してください。期待に応えられる人材がそろっていますし、そうありたいと日々訓練しています。」と心強い言葉で語ります。

　全国大会で入賞した3人は、県大会を1位で通過しており、大崎地域の救助隊員の救助技術が、県内でも高レベルであることがうかがえます。

　水害や土砂災害などの自然災害に対応する、中型水陸両用車（愛称カムロアークス）が、東北で初めて鳴子消防署に配備され、大崎地域の救助力が、日々進歩しています。

　救助隊員は、悲惨な現場や自らの身に危険が迫る中での任務もあり、緊張感やプレッシャーと戦っています。最も早く災害現場に駆けつけ命を救うという、消防士としての誇りを胸に、何度も災害現場に向かいます。

人の命を救うという信念を持つ消防士が、私たちの身近に居ます。彼らは、市民の平和を守るオレンジ色のヒーローです。

写真：はしご車で、建物2階に取り残された人を救出する訓練。はしごの上から放水銃で消火しながら救助します。

写真： 地下やマンホールなどでの災害を想定し、5人1組（要救助者を含む）で行う引揚救助訓練。4人で連携して下にいる要救助者を救助します。

写真：山村 俊さん（大崎地域広域行政事務組合消防本部古川消防署所属）

「古川消防署の朝ごはんは、必ずうどんを食べます。当番制で料理をしますが、どの麺を使うかも決まっているので、それ以外のうどんが出たらみんな気付きます！隊員たちとは、同じものを食べ、24時間ともに過ごしています。第二の家族ですね。」

写真：氏川 尚樹さん（大崎地域広域行政事務組合消防本部鳴子消防署所属）

「今の目標は、宮城県防災航空隊隊員になることです。大崎広域消防本部からは3年に1人のみ。ライバルは多いですが森田さんの後を目指し頑張ります！」

写真：森田 雄一さん（宮城県防災ヘリコプター管理事務所宮城県防災航空隊所属）

宮城県に3年間の派遣。消防防災ヘリコプターの副隊長として山岳救助、水難救助、山林火災での空中消火など、空から命を救う。